

新曆考

本居宣長

あらたまの年の来経ゆき、かへらひめぐらふありきまは、はじめ終のきははなけれど、大穴牟遲少名毘古那の神代より、天のけしきも、ほのかに霞の立きらひて、和けさのきざしそめ、柳などももえはじめ、鶯などもなきそめて、くさぐさの物の新まりはじまる比をなむ、はじめとはさだめたりける、

天はそら、和はのどけし、新はあらたまる、

年の首は、まことに此時なるべきことわりいちじるきを、から国にては、古夏の代には、今の正月を正月とせしを、殷の代には、今の十二月を正月とし、周の代には、今の十一月を正月として、おのくその月を年の始とす、これを三正といひて、例の皆理ある事のごとくいひなせども、まことには然らず、すべて万の事を、改むるをよきにする国俗なれば、たゞ己が功を示せむとてぞ、かゝる事まで改めたる物なる、さても世中のためによくばこそさもあらめ、なれたる事の俄にかはりて、まぎらはしければ、中々に民の煩となりて、よきことはいさゝかもなし、さればこそ周の代までも、国々の民などは猶なれ来つるまゝに、夏の代の定め今の正月を、正月とはし居しことも有つれ、これにても、正朔を改むるは、民のわづらひにて、よからぬわざなる事をさとるべし、さて秦の代には、又改めて、今の十月を正月とせるを、漢の代になりても、景帝といひし王が時まではさて有て、史記漢書などいふふみに、

歳首トシノハジメごとに、冬十月としるせるは、又をかしきことなり、もし十月を始ハジとせば、かの三代のごと、すな
 はち其月を正月とこそいふべけれ、はじめをしも十月といへるは、何ナニの意ココロぞや、こは歳の始は、秦のさ
 だめをもちひながら、月の名は夏カの定めによれるにや、いとまぎらはし、さて武帝といひしが時に、又
 もはら夏カの定めを用ひてより、今の世にいたるまで、改むることなし、こは孔丘も、夏カの時を行ヲコナはむと
 いへりし如く、まことに然るべきわざなり、さて皇国ミクニにも、今の立春の程を春の始ハジといひて、年の始と
 せるは、から国コクより曆コヨミまゐりきて後に、長曆をもて推カツへて、上つ代シカより然シカ定めつる物ならむ、と思ふ
 はひがこゝろえなり、こは曆によることなく、もとより然シカ有シカしこと、上にいへるがごとし、
 さて一とせの来経行キヘユクあひだを、四つにきざみて、春夏秋冬とぞいひける、これはた神代シカより然シカあり来ぬる事
 なれば、今その故ユエは、いかなりとも知シルべきならねど、こゝろみにいはば、温アタタカなる暑アツき涼スズシき寒サムき四つのかは
 りのあればなるべし、
 抑ソモツモヒトセ一年は、四月ウツキより九月ナガツキまで六月ム夏、十月カミナツキより三月ヤヨヒまで冬と、二つに分たらむも、又つねのごと四つ
 にても、又二月フタツキづゝ六つに分ても、又四十五六日づゝ八つに分ても、みな同じことにて、難ツミなかるべき
 中に、四ツに分れたるは、かならず然るべきおのづからのさまなり、暑アヒタき寒アヒタき中間アヒタに、暑アヒタからず寒アヒタからず
 て、温アタタカなる時と、涼アタタカしき時とのあれば、二つにてはたらず、六八ムツヤツにてはくだくしくて、過スギたればな
 り、さて温アタタカなる暑アタタカきすゞしき寒アタタカきによりて分れたらむにつきて、おのゝその中英ナカバをもてなかばとせ
 ば、一キサラギヤヨヒウツキ二キサラギヤヨヒウツキ三キサラギヤヨヒウツキ四月キサラギヤヨヒウツキを春、五サツキミナツキフミツキ六サツキミナツキフミツキ七月サツキミナツキフミツキを夏、八ハツキナガツキカミナツキ九ハツキナガツキカミナツキ十月ハツキナガツキカミナツキを秋、十一シモツキシハスムツキ十二シモツキシハスムツキ正月シモツキシハスムツキを冬ともさだむべし、三月ヤヨヒ
 は温アタタカなるなかばなれば、春のなかばとし、六月は暑アタタカきなかばなれば、夏のなかばとするが如し、され
 どさはあらで、皆その始ハジをはじめと定めたる物なり、正月ムツキはあたゝかなる始ハジ、七月フミツキはすゞしき始ハジなる故

に、春と秋とのはじめなるがごとし、餘もみな同じ、これらも神の御心もてさだめませる物なり、

此春夏秋冬てふ名ども、いとく古く聞えて、古事記書紀の歌どもにも、をりく見えたり、

春日といふこと、書紀武烈御卷の影媛の歌に見え、夏虫といふこと、仁徳御卷の磐媛命の御歌に見え、

夏草といふこと、古事記の遠飛鳥宮段の、衣通王の御歌に見え、秋の田といふこと、万葉集二の卷

の磐媛命の御歌に見え、冬木といふこと、古事記明宮段の吉野の国栖人が歌に見えたり、此ほか歌

ならぬは、猶ふるきもあり、

かくてこのよつの時を、又はじめなかば末と、三つづゝにききみて、春の始秋のなかば冬の末などいへりき、

上つ代の四時は、曆の節気のきざみと同じくて、春の始は、いはゆる立春のころなり、さて立春のころ

より、二月の節の比までを、春のはじめとし、それより三月の節のころまでを、春のなかばとし、それ

より四月の節の比までを、春の末とせり、夏秋冬もなずらへてしるべし、さてかく三つづゝに分て、始

なかば末とはいひしかども、某月といひて、一年を十二月と定むることはなかりき、

その春のはじめは、すなはち年の始なれば、上にいへるごとくにて、夏秋冬のはじめなかばすゑも、又その

をりくゝの物のうへを見聞て知れりしこと、春のはじめと同じくて、天のけしき、日の出入かた、月の光の

清さにぶさなどに考へ、あるは木草のうへを見て、此木の花さくは、その季のそのころ、その木の実なるは、

そのときのそのほど、この草の生出るは、いつのいつごろ、その草の枯るは、いつのいつほどとしり、あ

るは田なつ物島つものにつきても、稲のかりどきになるはそのほど、麦の穂のあからむはそのころ、といふ

ごとくころえ、あるは鳥のときよにゆきかへるを見、虫の穴にかくれ出るをうかゞひなど、すべて天地の

うらに、をりくゝにしたがひて、うつりかはる物によりてなむ、某季のいつほどとはさだめたりける、

上なる天はそら、季はみなとき、下なるも皆おなじ、四時を四季ともいひならへるによれり、某はそのとよむ、

後の世には暦といふ物有て、月日のさだめはみなゆだねおく故に、天地の間の物のうへを見聞て、考へむ物ともせず、常に心をつけざれば、見ても見しることなし、されば今の人などの心には、上件のごとくして定めむをば、おぼつかなきことと思ふべけれど、いにしへこよみのなかりし代には、かならず然して定むるならひなりしかば、人みなよく見しり聞しりて、違ふことなかりきかし、すべて何わざも心をつけてつね馴ぬる事と、心もつけずなれざることとは、思ひのほかに、こよなきかはりのある物なり、万葉集の歌に、ひさかたの天のかぐ山、此ゆふべ霞たなびく、春たつらしも、又、うちなびく春たちぬらし、わが門の柳のうれに、鶯なきつ、春過て夏来たるらし、白妙の衣ほしたり、あめのかぐ山、妹が手を、とろしの池の浪間より、鳥音けになく、秋過ぬらしなどよめる、みな見聞く物によりて、その時をしれる趣にて、上つ代の意にかなへり、そがなかに、春過ててふ大御歌は、殊に人のしわざをすら見そなはして、しろしめしつる御趣なるをや、此ほかにもおほかれど、さとりやすき二つ三つをあげつ、すべて今の世にいたるまでも、歌によむおもむきのみは、からごゝろのさかしらはまれらにて、おほくは古意にかなへるを、万葉集などのはさらなり、

さてしか一季の来経をば、

来経はきへ、きへとは、古事記に、倭建命の御歌に答へ奉り給へる、美夜受比売のうたに、あらたまの年が来経れば、あらたまの月は来経ゆくと見え、万葉集十五のまきに、あらたまの月日も来経ぬとあるごとく、年月日いづれにまれ、いまだ来ざりしが、つぎくに来つゝ経行をいへり、さて

来経キヘといへば、すなはち年月日の経ヘゆく事になりて、万葉などに、け長くとおほくよめるも、来経キヘ長ヘくにて、そのほどの久しきをいふ古言フルコト、又日を数カフへていくかといふも、幾来経いくケ、暦をこよみとつけたるも、来経ケ数ヨミにて、一日ヒトヒくつぎくヒトヒに來経キフるを、数カフへゆく由ヨシの名なり、されば今一季ヒトトキの來経キヘといへるは、春夏秋冬いづれにまれ、一季ヒトトキを経フる間アヒダのことなり、下にいへるも皆同じころぞ、たゞ三つに分ワケいへるのみにて、そのほどの日次ヒナミまでを、いくかの日くヒトヒとさだめいふことはなかりき、されば年のはじめ季トキのはじめなども、きはやかに某日ソノヒよりとはなく、その日数はた、かならず幾十日いくツツカとさだかにはあらずて、みな大オホらかにむ有ける、

年トキまた季トキの日数も、始メの日も、きはやかなる定まりはなかりしかども、神代よりいく万の年をか経ヘ来キタりぬる、そのあひだに、かぎりなき世ユ中の人の中には、かしこく思ひがねのすぐれたらむも、さはに有リぬべければ、暦はなくとも、みなこまかにわきまへしるべき事も、あるまじきにあらざれども、から人のごとさくじりたる心なく、人の心も大オホらかなになむ有リければ、世間ヨリナカにしらであり来キぬる事を、しひて考へしらむのこゝろしなれば、たゞもとよりのまゝに、大オホらかにては過にしなるべし、されどおしなべてのよの人のさとりにも、大かたにひとゝせ一季ヒトトキの日数などは、おのづから世々にこゝろみしりて、つぎくにいひも伝へ、伝へたるを聞ては、みづからいよくこゝろみ知シてありぬべければ、某季ソノトキのはじめは、昨日キノフにやあらむけふにやあらむ、明日アスにやあらむといふばかりまでは、おのづから定まりもしけむかし、されど猶、さだかに今日といふさだまりはなければ、たゞ思ひとれるこゝろぐヒトヒにて、此人かの人、一日二日のけぢめはつねにありぬべし、しかたがひぬれども、もとより日数のさだまりしなれば、これもかれもたがひなくて、次ツギの季トキも又同じ事なりき、然るを季トキの始メ月のはじめを、きはやかに定め、その

日より数へて、二日にあたる日を、やがて二日といひ、三日にあたる日を三日といひて、つき／＼に皆
 かく、某日某日と定めいふことは、はるかに後に、暦を用る世になりての事なり、但し其後も中昔まで
 は、たゞ二日三日などのみはいはで、二日の日三日の日などといへりと思はれて、仮字書にはおほく
 然書り、これは古言の心ばへにてよろしきは、暦を用ひ始められし時に、定められしことなるべし、其
 故は、すべて上代には、一二三より千万といふまで、たゞ物の数を計ふる名にこそ有けれ、次第をいふ
 名にはあらざりき、物の次第を一云々二云々などいふは、からぶみまゐりきて、読まれ聞なれて後の事
 なり、から国にて一二三などいふは、数をかぞふるにも、次第をいふにも、兼用る字なる故に、こゝに
 もおのづからそれがうつりてこそ、次第をいふにも用るならひにはなりぬれ、本より然にはあらず、古
 の言に、物のついでを、一二三などといへる例さらになし、かの倭建命にこたへ奉りし歌に、夜には九
 夜、日には十日をとよめるも、日次のついでにはあらず、夜と昼との数をいへる言なり、されば日数をい
 くかと数ふることは、上つ代より有しなり、又みかしほ播磨はやまちとよめる、みかしほも、三日の日
 の潮にはあらず、嚴潮の意にて、速といへるにかけたる枕詞なること、古事記伝、建御雷神のところ
 にいへるが如し、又万葉集の歌などに、三日月とよめるも、三日の月といふにはあらず、朔より三日
 にあたる夜の月といふ意なり、さればかの二日の日三日の日などといへるも、二日にあたる日、三日に
 あたる日といへる意をつゞめたる名なり、然るを後の世にいたりては、たゞ二日三日などのみいひて、
 古のまゝにいふをば、かへりて言重なれると思ふは、もはら古の意をうしなへる故なり、そも／＼暦
 を用ひ始め給へるころは、やゝ降りぬる世なりしすら、猶然古言の意をうしなはざりしを思へば、まし
 て上つ代には、季のうちの日次を、いくかくと定むる事のなかりけむも、うべにざりける、もし定め

むとすとも、一日^{ヒトヒ}／＼名づくべき詞なからむを、しひて名づけむとせば、後にむ月きさらぎなどいふ月の名のごとく、三十日^{ミソカ}の名を、こと／＼くまうけずばあるべからず、されどそれまでもあらず、その季の始^メをすら、其日^{ソノヒ}とは定めざりしかば、つき／＼の日どもも、いかでかはさだめむ、ある人とひけらくもし日次^{ヒナミ}のさだまりなからむには、たとへば親^{オヤ}などのみまかりたらむ後なども、年々いづれの日をか其日とは定めて、しのびもしなむ、こたへけらく、上つ代には、さるたぐひの事共も、たゞ某季^{ソノトキ}のそのほどと、大らかにさだめて、ことたれりしなり、後の代のごと、某月^{ソノツキ}の某日^{ソノヒ}と定むるは、正^{タダ}しきに似たれども、凡て暦の月次日次^{ツキナミヒナミ}は、年のめぐりとはたがひゆきて、ひとしからねば、去年^{コゾ}の三月^{ヤヨヒ}の晦^{ツクヨリ}は、今年^{トシ}は四月^{ウヅキ}の十日ごろにあたれば、まことは十日ばかりも違^{タガ}ひて、月さへ其月にあたらぬりもあるなれば、中々に其日にはいとうとくなむあるを、かの上つ代のごとくなるときは、某人^{ソノヒト}のうせにしは、此樹^{コノキ}の黄葉^{モミヂ}のちりそめし日ぞかし、などとさだむる故に、年ごとに其日は、まことの其日にめぐりあたりて、たがふことなきをや、さればこは、あらしに似て、かへりていと正^{タダ}しく親^{シタ}しくなむ有ける、凡て過^{スベ}に仕方、又ゆく末の事を、いつとさしていふべきをば、近^{チカ}からむ事は、其事^{ソノコト}の有しは、幾日^{イクカ}さき、某事^{ソノコト}のあらむは、いま幾日^{イクカ}といひ、あるは幾十幾日^{イクソノマリイクカ}まへ、その季^{トキ}のそのころ、某事^{ソノコト}の有し、今幾十幾日^{イマイクソノマリイクカ}ありて、その季^{トキ}のそのころ、某事^{ソノコト}のあらむ、などぞいひけむ、されど遠^{トホ}からむ事は、さしもおほくの日数をかぞふべきにもあらず、また日次^{ヒナミ}の定^{ヒナミ}まらざりし世には、いくかの日といふことなければ、それまでを尋^{タツ}ねべきにもあざれば、ただ去年^{コゾ}の某季^{ソノトキ}のそのほど、来^コむとしのその季^{トキ}のそのころといひ、あるはいく年さきの、某季^{ソノトキ}のそのころ、いまいくとせ有ての年の、その季^{トキ}のそのほどなどいふべし、なほ遠^{トホ}き昔^{ムカシ}の事ならむには、某宮^{ソノミヤ}に天^{アメ}の下^{シタ}しろしめしし御代^{ミヨ}の、いづれ上つ代のことばなり、かゝれば上つ御代^{ソノミヤ}／＼の年

を、元年二年三年などと、史フミに記シルされたるも、訓ヨミに心得ある事ぞ、まづ元年は、もじのまゝにはじめのとし、とよみてよろしきを、二年三年よりはみな、次第ツイデをもていへる文モジなれば、もじのまゝに訓ヨミては、皇国ミクニの詞ミコトコトつかひにあらざ、ふたとせとのみ訓ヨミては、たゞ数をかぞへたるのみの詞ミコトコトにて、其年をさしていふにならず、又ふたつのとしと訓ヨミては、年といふ物の二つあるをいふ詞ミコトコトになりて、さらになほざればなり、されば元年ハジメノトシよりの数をかぞへて、ふたとせにあたるとし、又はふたとせといひしとしなどいふぞ、上つ代のことばなれば、今も然シカよむべきことなり、三年四年より後も皆同じ、然るを近き世の人の文などに、年号月日ナカムカシをかくに、某年号ソノの二つの年、三つの年などとかくは、皇国ミクニの詞ミコトコトのつかひざまをしらざるなり、中昔ナカムカシまでの文には、然書シカカケることほなくて、某年号ソノの二とせにあたる年、あるは二とせといふとし、などとのみ書カケりき、これ古の意言ココロコトバの残れりしなり、此ことばつかひは、年をいふのみにあらず、何事ツイデにもその次第ツイデをいはむには、皆かくさまにいふぞ皇国ミクニのなる、さて此四時ヨトキのめぐりにはつかずて、外に又月ツキといふことのありて、天ソラなる月の、満ミチみかけみ、見えみ見えみする一めぐりを、一月ヒトツキとせり、

上に引る美夜受ミヤズひめの歌に、あらたまの月は来経行キヘユクとあるは、此月なり、そのさだめは、一月を三つにきざみて、ついたちもちつごもりといへり、そはまづ西の方の空に、日の入ぬるあとに、月のほのかに見えそむる比ヒを始メとして、それより十日ばかりがほどかけて、月立ツイタチといへり、月のやうタチくタチに立タチゆくほどなればなり、

月立はついたち、

朔ツイタチの始メを定ヒむること、日次ヒナミにはかゝはらず、今の二日フツカの日にまれ、三日ミカの日にまれ、昏クレに月の見えそむ

る日を始とせり、曆に朔とする日は、いまだ月見えざれば、なほ晦の末なり、から国にては、合朔といひて、月と日とまさしく一方に会て、いさゝかも月の光の見えざる日を、朔とはすめれど、皇国の古は然らず、ついたちとは、月立の意にて、月のそらに立て見ゆるをいふなり、立とは空に見ゆるをいふ霞霧などの立は、下より立のぼるをいふを、これは西の方へ下るころなれば、立といふ意たがへるに似たれども、昨日まで見えざりしが、初めてみゆるは、立のぼるに同じ、さてやうくに昏に高く見えゆくころをかけて、ひろく月立とはいへり、倭建命の、美夜受比売のおすひのすそに、月水のつきたるを見そなはして、月立にけりとよませ給へるも、天の月の立によせて、月とはのたまへるなり、月立という事、これにて心得べし、さて春の立、秋のたつなどいふは、から国にはゆる立春立秋より出たる言か、又はこの月の立よりうつれるか、わきまへがたし、万葉集に、正月たつとよめるは、月のたつをいへるなり、又今の世の言に、月日のたつといふは、過行ことにて、こは今月の立を、先の月の過たる方へうつしていふ言なり、

さて中ごろ十日ばかりがほどを、もちといへり、月の形の満たればなり、その中に、月立の初より十四五日にあたる夜の月は、望のきはみなり、

十四五日はとをかあまりよかいつか、望はもち、

もちとは満てふ意にて、月の満たるをいふ名なり、中旬のあひだみながら、空の月まさしく円にはあらざれども、缺たる所なく、やゝみちたれば然いふなり、さて今望の極みを、十五六日といはずして、十四五日にあたる日といへるは、上つ代の朔は、曆の二日三日ごろなればなり、さて伊勢物語に、そのころみな月のもちばかりなりければとあるは、中旬をひろくいへり、六月へかけていへるは、後の詞なれど、

中旬ナカゴロをもちばかりといへるは、古ヘの言コトバののこれりしなり、又万葉集三の巻の歌に、富士フジの嶺ネの雪の事を、
 六月十五日ミナツキノモチに消ケぬればとよめり、空の月の事ならで、十五日をもちといひしは、これも古イニシヘコトバ言コトバなり、
 さて末十日ばかりがほどを、月隠ツギモリといへり、月のやうコモくユカに隠コモり行ユカほどなればなり、その中に三十日ごろに
 あたる夜は、月隠ツギモリのきはみなり、

月隠はつごもり、

此ほどは、月の出ることおそくなりて、やうコくロに見ゆることすくなくなりゆく故に、月ツごもりといふ、
 つごもりは月隠ツギモリの意ココロにて、月のかくれて見えぬをいふ名なり、さて曆法ヨリに依ヨリて見るに、天ソラの月の一め
 ぐりの来経キヘは、廿九日六時あまりにて、廿九日にはあまり、卅日にはたらざる故に、卅日と定めて見れ
 ば、月の出入時イデイルトキの、先サキの月よりは遅オソくなりて、二月フタツキのほどには、おほかた一日たがふ故に、曆には大小
 の月を分て、二月フタツキに一月をば廿九日として、晦朔ヒトツキをとツイタチのふる事なれども、皇国ミクニの上代ツには、すべて日
 数にかゝはらざりし故に、たゞ空の月を見て、朔ツイタチのはじめを、一人ヒトリは今日ケフぞと思ひ、今ひとりキノフは昨日
 ぞと思ひ、今一人アスは明日アスぞとおもひて、心々に定めても、みな違タガふことなかりしかば、大小を分ワケざれど
 も、晦朔ツゴモリツイタチのみだれ行ヒトツキことなかりき、

かくして一月とは定めたりしかども、月々の名もなくこれは何れイツの月をはじめをはりといふ次第ツイイデもなく、四時ヨツノトキ
 にもつかず、たゞ一月ヒトツキくヒトツキと経ヘゆくヒトツキのみにて、すべて年のめぐりとは別事コトコトなりき、さるはこれも十二トフマリフタたび
 めぐれば、大かたに一年ヒトトセなれども年の来経キヘとは、十日トシカあまり日数のたらざる故に、

年の一めぐりは、曆の立春より立春の比までなれば、三百六十五日三時カムノクダリにて、上件ツキの十二月の日数、三
 百五十四五日なるとは、十一日ばかりのけぢめあり、

つねに四時の始終とは、おくれさきだちつゝ行たがひて、たとへば秋のもなかのころ、天の月は、月陰の末月立のはじめなどの時もありけり、されどもとよりこと事にし有ければ、かれはかれこれこれにて、かゝはらずなむ有ける、

かく二かた別ことにて有ければ、閏月といふ物を加へざれども、年のめぐりのたがひゆくことなかりき、かくてこの、月といへる方の来経も、朔望晦、またははじめつかた中比末つかた、ともいへるのみにて、これはたいくかの日くといふ日次はなかりき、

此、一月を三つに分いへるのみにて、日次はなかりし定めは、中昔までかつぐのこれりと見えて、古今集春下、なりひらの朝臣の歌の詞書に、やよひのつごもりと有て、歌には、春はいくかもあらじと思へばとよめり、そのころまでも、月の末つ方をひろく晦といへりし故に、三十日の日よりは前の事なれども、詞書には晦といへるなり、然るを後の世の積には、卅日の日なれども、歌には大らかに然よめるなりといへるは、古のことをしらずてのおしあてなり、さて又物語書などにも、一月を四つに分て、朔十日廿日晦、とひろくいへる事もおほし、いせ物語に、上に引ることく、六月のもちばかりといへるはさらにて、又時はやよひのついたち、む月の十日ばかりのほどに、さつきの晦に、しはすの晦に、時はみな月のつごもり、かみな月の晦がた、時はやよひの晦なりけりなどいへる、後の世のごとく、みな一日にかぎれる名ならましかば、かくおほく晦々などと、同じ日をのみいましやは、又かげろふの日記に、つごもりに成ぬれど、人は卵花のかけにも見えず、廿八日にぞ、これも晦になるとは下旬になれるをいふなり、故下に十八日にぞといへり、又源氏物がたり藤末葉の巻に、四月朔ごろといへる所に、七日の夕月夜といへり、又うき船巻に、朔ごろの夕月夜ともいへり、まさしく朔の日

ならば、夕月夜といふばかり、月は見ゆべからず、また栄花物語若水巻に、朔も過ゆけばといひて、十日のひるつかたといへり、これも朔とは上旬ハジメツカタをいへるさまなり、又鳥辺野の巻に、十二月廿二日の事を、つごもりになりぬればといへり、又狭衣にも、晦になりぬればといひて、霧ふたがりて月もさやかならぬといへり、もし卅日ミツカの日ならむには、月はあるべからず、これらをもてしるべし、上つ代の定まりの心ばへの残りりしなり、此ほか十日比廿日比といひて、ひろく用ひたるもおほく見ゆ、それも心ばへは同じことなり、又今の世にも、月の内を、始つかた中ごろ末つかた、と分ワケいふことあり、月にのみいひて、ほかの事にはをさく、いはぬことばなり、これも古の言コトバののこれるなるべし、

そもく上の件カミクダリのごと、季トキのはじめなども、きはやかにあらず、月次ツキナミも日次ヒナミもなく、又かの天ソラの月による月は有しかども、別事コトゴトにてありつるなど、すべて事たらはぬに似たれ共、然思シカふは、よろづこまやかにこちたきをよきにする、後の世の心にこそあれ、上つ代は、人のこゝろも何ナニも、たゞひろく大らかなになむ有れば、さて事はたり、

すべて世の事は、あればあるまゝに手附タツキよくはあめれど、又あるまゝにわづらひも立タチそふを、なければ、なきまゝに事はたりて、わづらひなきは、かへりてまされるかたもある物なり、たとへば今の世に、山寺へのぼる坂などに、道のほどをこまかにぎざみて、幾町イクチヤウくとしるせる碑エリインを立たるところ、こゝかしこにあり、また大道オホミチには、おほく一里塚イチリツカといふ物有て、いづれも行かふ人のたづきとなるを、此大道オホミチゆく人は、一里塚にて事たりて、かの一町イチマチごとのしるしなくて、手著タツキあしとはさらに思はず、又なべての道には、一里塚だになきが多かれど、これはたなきままに事はたりてあらましかば、とは思はぬがごとし、またかの空なる月による月と、年の来経キヘとを、しひてひとつに合アハすわざなどもなくて、たゞ天地アメツチのあるがま

ゝにてなむ有ける、

此^{フタカタ}二方を、曆に一つに合せたるは、いと宜しきに似たれども、まことは天地のありかたにはあらず、もし
しか一つなるべきことわりなりせば、もとよりおのづからひとつなるべきに、さはあらで、おくれさき
だち行たがふは、必^{コトコト}別事にて有^リぬべきことわりあることなるべし、さて上^{カミノクダリ}件、上つ代の来^キ経のさだま
りをいへる、さる古^{ツタヘゴト}き伝説のあるにもあらず、おのれとしごころ、此事をいふかしく思ひわたりて、年月
かにかくに思ひめぐらして、おもひえつるおもむきなり、されどそは猶いかに有^リけむ、今おしはかりに
はしるべきにあらずと、うけひかぬ人かならず有^レべけれど、かならずかくあらではえあらぬわざぞかし、
これぞこの天地のはじめの時に皇祖神^{スメロギカミ}の造^{ツク}らして、万の国に授^{サツ}けおき給へる、天地のおのづからの曆にして、
もろこしの国などのこと、人の巧^{タク}みて作れるにあらざれば、八百^{ヤホヨロツチヨロツトシ}万^ヘ千^ヘ万^ヘ年を経ゆけども、いさゝかもたが
ふふしなく、あらたむるいたつきもなき、たふときめでたき真^{マコト}の曆には有ける、

皇祖はすめろぎ、いざなぎの大神いざなみの大神を申す、

もろこしの国などの曆といふ物は、神のなしおき給へるによらずて、聖人のおのが心もて作りて、民に
時を授^{サツ}くとか、ことよげにいふめれど、上^{カミノクダリ}件のごとく、天地のおのづからなるこよみにて、民は授^{サツ}け
れども、時をばみづからよくしることにて、まづ去年^{コゾ}まきおきし青^{アヲナ}菘の花の咲^{サケ}るを見ては、苗代^{ナハシロドキ}時をし
り、つくりおきし麦^{ムギ}の穂^ホのあからむを見ては、田^{タウウ}植るときをしり、又その稻^{イネ}の刈^{カリ}時をもて、又^{ムキ}麦^{マキ}まく時
をしるが如く、年々にかくしもてゆかば、いかでか其時々^{ナハシロドキ}のしりがたきことはあらむ、教^{ヲシ}へずて有^レべき
事を、なほこちたくをしふるは、すべてかの国^{クニニヒト}人のくせなりかし、さてその曆は、月の大小と閏^{ウツラフツキ}月とを
もて、朔^{ツク}晦^{クハ}と節^{タガ}氣と違^{タガ}はぬごとく、ひとつにあはせもてゆくなど、いとも巧^{タクミ}にはあめれども、猶^{サイ}歳^{サイ}差^サな

といふこと有て、数十年を^ヘ経ぬれば、一度といふ程づゝたがひゆくを、後の世には、つき／＼に此たく
 みくはしく成ぬれども、考へつくすことあたはざれば、をり／＼にその曆あらためずてはえあらず、又
 北斗七星の斗柄、いにしへは、子の月には子の方に^カ建し、寅の月には寅の方に^カ建せりといへるを、今の
 世には、寅の月に寅のかたには^ト建さずて、丑の方に^カ建すといへり、これ妄説にあらず、たしかなること
 なり、さればかゝることも、数千年を^フ経れば、かくたがひゆくことと見えたれば、これらの外にも、今
 まではたがひなくて、考へ得たりと思ふことどもも、また数千年を^ヘ経なむ後には、たがひゆくべきこと
 おしはかられたり、かくいへば月日星のめぐりも何も、後には^ツ次序なく、みな乱れゆくべきにや、とう
 たがふべけれど、然には^シあらず、すべて月日星のめぐりは、皆さだまり有て、いく万代を^ヘ経ても、いさ
 かもたがふ物にはあざれば、数千年のほどにたがへることも、然たがひもてゆきては、又みな本へ
 かへる事にて、それもすなはち定まりのうちなれば、まことにたがふにはあざざるを、たがへりと思ふ
 は、たとへば十日ばかりの^イ命ならむものの、^ソ天なる月の、^カ形も出入る時も、夜ごとにかはり行を見て、
 いたくたがひゆく物かな、かくしもて行て、後にはいかになりゆきなむ、とうたがふがごとし、おのが
^イ命のみじかくて、又始のごとくなりかへるを、え見ざるからの^ウ疑ひなり、然れば^イ曆法といふ物は、数
 万年を^ヘ経て、かの数千年の程にたがへる事どもの、又本に^カ復るを、いくたびも^ヘ経こゝろみずは、まこと
 に考へきはめむ事は、えあるべからず、又考への^ク精くなりもてゆくまに／＼、さきの考へのたがへる事
 の、つき／＼に見えしられつゝ、つひに^ツ盡るよあるべくもあらぬは、これも又、おもほえずやう／＼に
 本の方にかへりめぐりて、^コ来しかたの^ク精しと見しは、なか／＼に^ア粗かりける事の、あらはれゆくなりけ
 り、かくしてつひに本の^サ域に^カ復り^ツ著なむ時にぞ、^ミ皇国の上つ代の^オ大らかなりける定まりの、^マ真なるほ

どはさとりなむかし、但しこれらは、事のこゝろをつくして論アゲツラふなり、それまでもあらず、ちかくはつねに、月々の節氣と、天ソラの月による月とを、正しくは合マサすことあたはず、閏月ウレツツキをおかむとするきは、半月ツキナカラのたがひ有て、正月の始は、なほ十二月の中氣、七月の半ナカバは、猶その月の節氣なり、かくて閏月を置てすなはちは、又半月ツキナカラのたがひ有て、節中のさきだつことも同じほどなり、これらもなほ、その精クハしさのつきざるものなるをや、されば近き代になりては、かの国にても、世ヨ々の曆法に、年の来経キヘと天ソラの月による月とを、一つにあはせて、天ソラの月による月のかたをむねとせるは、よろしからずといふ事を、考へ出たる人も出来ぬは、かつぐにかの本の方にめぐりかへるしるしなりけり、然有けるを、やゝくだりて、もろこしの国書クニブミわたりまうで来て後キに、かの国のさだめにならひてぞ、一とせをトラアマリフタツキ十一月とはして、その月次ツキナミを四時ヨツノトキにくばりついでて、

もろこしの十二月ツキは、天ソラの月による月をもて定めたるを、皇国ミクニにてそのかみさだまりしは、猶もとよりのまゝに、年のめぐりにしたがひて、曆の節氣と同じかりき、むつきささらぎなどと、その月々の名をも定められたりける、

すべてこれを月と名づけられたるも、ともにかの国ノにならへるか、又こゝにも、本よりかの天ソラの月による月といふ事の有つれば、その名をとれるにも有べし、万葉集にむ月たつとよめるなど、月に立タツといふも、こゝの詞なり、

此時よりぞ、春某月秋某月などと、月の名をあげ、又それを季トキへかけていふことなどもはじまりける、さて此月々の名ども、古事記書紀などの歌には、一つも見えたるはなけれど、そはおのづからもれたるにこそあらめ、皆いとふるければ、月次ツキナミの定まりし世よりのなるべし、万葉集にはおほく見えたり、

此名どもも、もろこしのにならば、やがて正月ヒトツキ二月三月などとこそつけらるべきに、きはあらで、あらたにまうけて、むつききさらぎやよひ、などとしもつけられたるは、上にいへるごとく、物の次第ツイデをヒトフタミ一二三などいふことは、古ヘはなかりし故なり、

さてかく月次ツキナミのさだまりて、月々の名どもも出来イデキつれども、かの天ソラの月による月と、此月次ツキナミとは、別事コトコトなりし、又いくかの日ツキナミといふ日次ヒナミ、一月の日数の定まらざりしなど、これらはなほ本のまゝにてなむ有ける、

此時ヒナミにしか月次ツキナミをさだめ、月の名をもつけられたらむには、暦を用ひて、ふたかたの月を一つにあはせ、日次ヒナミをもとに定めらるべきに、猶さばかりまでは及ばざりしは、いかにといふに、すべてなにわざも、久しくなれ来キつる事は手著タツキよくて、にはかに改アラタまりぬる事は、たづきあしきならひなるに、神代より、よろづおほらかなるになれきつる世中の、あらたに日次ヒナミなどきはやかに定まり、月の大小閏月ウルフツキ、などいふ事の出来イデキたらむには、中々にてわづらはしく、たづきあしかりぬべければ、俄ニハカにさまではえあらざりけむ、さて此時、年の来経キヘの月次ツキナミと、天ソラの月による月とは、なほ別事コトコトなりしかば、正月ムの朔、八月ハの望モチの夜、十二月シハスの晦などと、朔望晦を、月の名へかけていふことは、いまだなかりき、それは猶はるかに後にこよみを用ひらるゝ世になりての詞なり、其故は、む月などいふは、月次ツキナミの月の名、朔ツイタチなどいふは、天ソラの月による月のうちのことなればなり、此二かたの月には、長ナガき短ミジカきけぢめしあれば、つねにおくれさきだちて、ひとしくはならびゆかねば、たとひしひてしか某月ソノツキの朔ツイタチ晦ツイタチなどいふ共、始つ方か中比ツキナミか末つかたか、わきまへがたかりぬべし、

・そもくこの月次ツキナミのさだまりつるは、いづれの御代よりとも、さだかにはしりがたけれども、暦をもちひそめ給へりし比よりは、はるかに古ヘの事とは思はるれば、

古事記の長谷朝倉宮の御時に、引田部赤猪子といへりし嫗の、八十年の前の事を、天皇に申せし言に、
 其年其月とあるを見れば、そのかみはやく某月といふさだまりの有し事しられたり、
 もしくは難波高津宮の御世のころにもやありけむ、

その故は、軽島の明宮の御世にくだらの国より、和爾などといひし物しり人ども参り来て、はじめて
 皇子たちにもろこしの書を教へまつりしに、いとよくさとりました事、又伊波礼の若桜宮の御代より、
 国々に史をおきて事を記されしことなども、書紀に見えたればなり、古事記に、息長帯比売命の、筑
 紫の末羅の玉島川にして、年魚を釣したる事を記したるに、当二 四月上旬一、といへることあるは、いま
 だから書の渡りまうでこぬほどにて、月次も月々の名もなかりし代なれば、四月とあるは、そのかみの
 詞にはあらず、其次の文に、故四月上旬之時、女人云云云 釣二 年魚一、至于今不絶也、とあるをもて見
 るに、後までさる事のあるが、四月上旬なるにつきて、その始をも、其月の名もて語り伝へたるものな
 り、もとはたゞ、夏のはじめなどぞ、語りつたへたりけむかし、

また甲子といふ事もちひはじめられしも、同じ御代などよりのことならむか、

甲子とは、十千十二支をいふなり、暦はなくとも、年と月との甲子は定めつべし、さてこれも、あれば
 あるまゝに、たづきよきに似たれども、なくば又なきまゝに、事はたりぬべし、これにくさぐさこちた
 き理をいふは、例のから国のくせなれば、あげつらふまでもあらず、

かくて又あまたの御世くを経て後に、暦をもちひはじめ給ひけるよりぞ、

もろこしの国のこよみの、皇国に渡りまうで来つるは、まづ師木島の御世の十四年に、暦博士、また暦
 本をたてまつれと、百済国に勅ありて、同十五年に、暦博士固徳王保孫、といへる人まうで来

つること見えたり、これや始なりけむ、されどいまだ世には行はれざりしを、又小治田宮の御代の十年に、くだらのほうし観勒といふまうで来て、曆本をたてまつりしを、陽胡史の祖玉陳といふ人、この僧に曆法をならひて、事なれりと見えたれども、此時も、まさしくこれを用ひて、世におこなひはじめ給へりし事は見えず、政事要略に、此御世の十二年正月朔より、始めて曆日を用ひたまひよし見えたり、さも有べし、

月次の月と、天の月による月とを、ひとつにあはせて、いくかの日いくかの日といふ日次も、一年一月の日数も、みなきはやかに定まりて、よろづ今のごとくにはなれりける、

然るを書紀には、神武の御卷に、是年也太歳甲寅、冬十月丁巳朔辛酉、辛酉年、春正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮、などあるをはじめて、すべて上つ代の事にも、皆年月をしるし、又甲子にうつして、日次までをしるされたるは、いともく心得がたし、そもくこれみな、後の世よりさかさまに推へて、長曆といふものをもて定めたりと、世の人はこともなげに思ふめれど、まづ御代くの年の数も、伝へくのかはり有て、さだかならねば、某年といへるすらうたがはし、されど年は、しばらく一つの伝へにつきても、定めつべし、次に某月といへる事、上つ代には、月次も月の名もなかりしかば、いかなれども、もとはたとへば、春のはじめといひつたへしを、月次出来て後に、正月とはいひ伝へたりとせば、これもさもあらむを、某日と日をしもさゝれたるぞ、いかにとも解べきよしなかりける、日次のさだまりなかりけむ世の事を、某日といひ伝ふべき由あらめやは、もし上つ代に月次日次なかりきといふおのが考へを、信ぬ人もありなむか、いでそのゆゑをつばらかにさとさむ、すべて曆といふ物のなき世には、某月の某日と定むべきよしなし、月に大小を分ず、年に閏月を加へずては、日次と天の月のめぐ

りとたがひ、又月々の節氣も、みなたがひゆくめればなり、まづ曆法によりて見れば、月の一めぐりは、廿九日六時あまりなるに、大小を分ずして、いつも三十日を一月として、朔ツイタチを定めゆかば、一年のほどに、五六日のたがひ出来て、正月の朔は天の月に合アヒたらむも、十二月になりなば、朔とせむ日、天の月はユミハリ弦なるべし、かくしもてゆきて、五年あまりには、又本の正しきにかへれども、そのあひだには、朔ソラに天の月望モチになり、下の弦ユミハリになりなどせむ月もあらむを、さるころもなほ朔ツイタチとしてありなむや、又年の一めぐりの来経キヘは、三百六十五日三時なれば、十二月の日数三百五十四日なるとは、十一日ばかりのけぢめあり、たとひ十二月をみな三十日としても、猶五日あまりのけぢめあるを、閏月ウルラツキなくて過スキなむには、時々暑さ寒さなども、みなやうくにたがひゆきて、廿年のほどに、百日あまりたがひ、三十四年あまりには、つひに半年トシナカラたがひて、冬と夏ユキと行かはりて、六月ミナツキのころ、十二月シハスのほどのごとく寒からむを、なほ夏ナツミナツキ六月といひ、十二月シハスのころ、六月ミナツキのごとく暑からむをも、なほ冬フユシハス十二月といひて有リぬべしやは、しかれば、もろこしのならぬ他曆アタシヨヨミをもちひられむはしらず、ひたぶるに曆なからむには、某月ソソツキといふことだに、天の月ソラによりては、さだめがたからむを、まして某日イカカヒといふことをば、いかにしてかはさだめむとする、書紀をよまむ人は、かならずこのころをえて、

天明の二とせといふ年のなが月の十日あまり二日の日

- 『本居宣長全集』第八卷（筑摩書房、一九九三年十月、初版第五刷）所収。
- 読みやすさのために、旧漢字は新漢字に変更した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。